第一講（一九二一年四月十一日、ドルナッハ）

今回の講座は昨年行われた医学講座の補講ですが、本当の意味でその捕捉と理解できるものをお届けして、特にこの講座の終わりにはいくつかの治療的展望として明確な形になるものがもたらされるように期待しています。この講座では、昨年行った考察のテーマとなった事柄を、別の側面から考察しようと思います。それは病気の人間と治癒する人間に関する事柄です。別の側面からこのテーマを考察することによって、異なる別の観点からこれにアプローチできるだけでなく、私たちが考察した物質〔Stoff〕への理解が広がります。今回は、アントロポゾフィーを学んでいる皆さんが知っている、人間の物質体、エーテル体などの構成要素が、病気になる場合と治

癒する場合ではどのように作用するかを明らかにしたいと思います。昨年の講座では、内的な人間の、外的な現れを描写することに限定しなければなりませんでしたが、今回は以下のことを明らかにしたいと思います。それは、人間の外側にある物質によって、人間の諸構成要素が、どのような影響を受けるのかということです。その物質は、特に治療薬として使用することのできる物質であり、人間の有機体に対して単に物質的なものとは違った影響を及ぼすことによって、治療薬として作用することのできる物質です。そこで導入として、いくつかのことを述べます。

昨年の医学講座で同じテーマについて語った時も、治療薬としての物質については様々な点から説明しました。けれども人間の本性のより高次の構成要素について、すなわち人間の本性をなす超感覚的な構成要素について考察する時には、もはや同様の仕方で物質を語ることはできません。今回の講座では短く簡潔にお話ししたいのですが、その議論全体を通してある原則的な事実が分かっていなければなりません。つまり、人間にとっての環境との関わりや、健康だったり病気の状態であったりする時の人間の振る舞いについて本当に理解しようとするなら、今日の通常の科学で慣れ親しんでいる物質的なものから出発する方法では、もはや考察を始めることはできないということが分っていなければなりません。出発点とすべきものは、本来は物質ではなく

プロセスであり、完結したものではなく生起するものなのです。物質について語る時には、物質、すなわち感覚的外観において物質として現れるものの中にあるものはプロセスであり、静止に至ったプロセス以外の何ものでもないと考えなければなりません。

珪土（Kieselerde、シリカ）を例に挙げると、私たちはまず珪土を一つの物質と見なします。けれども私たちがある特定の輪郭を持ったいわゆる物体をイメージするなら、本質的なことはまったく分かりません。本質的なことが理解できるのは、非常に広範囲に及ぶプロセスを魂の目によって捉える時だけです。この広範囲に及ぶプロセスは、全宇宙の中で一つの個別のプロセスとして存在していて、それはいわばプロセスとして結晶化して静止に至り、ある意味で平衡状態に至ることができます。そしてそのプロセスが静止状態に至った時に、私たちが珪土として観察するものの中に現れるのです。本質的に重要なのは、人間の内部のプロセスと外側の宇宙で生じるプロセスの間にある相互作用に注目することです。健康な人も病気の人も、宇宙との絶え間ない相互作用の中にいるのです。

明日は実際の物質を取り上げますので、今日はこの相互作用をイメージできるようになる事柄から始めようと思います。そのためには、アントロポゾフィーによって人間の本質を真に理解し

ようと努めなければなりません。私がこれまで人間の三分節構造として何度も説明してきたことを、今日は人間の中でそれが空間的にどのように集中しているのかという観点から考察することによって、まずは図式的に表そうと思います。神経感覚人間を他の二つと区別すると、それは主に頭部に集中していることを私たちは知っています。しかしその頭部に集中しているものは人間全体に広がっており、人間全体に存在しています。つまり、人間は頭部においてもっとも神経感覚存在なのですが、一方では人間全体が頭であり、他の二つの部分では頭部に比べて頭部的なものが少ないのです。そのように、神経感覚人間と呼べるものは、頭部に局在していると考えることができます。しかし人間の三分節の考えを、今回の目的にとって有益なものにするために、呼吸有機体と循環有機体の両方を含むリズム人間を、さらに二分節構造として考える必要があります。つまり、一つはより呼吸系に、もう一つはより循環系に近い傾向があります。この循環系には、四肢人間と代謝人間との関連を示す全てが組み込まれています。

人間の頭部を詳しく調べようとすると、有機体の最も神経感覚人間的な部分を研究することになります。人間の頭部機構は、それ以外の機構とはまったく本質的に異なっています。また人間本質のより高次の形体に関しても、それ以外の機構とは異なっています。つまり、人間の頭部を

霊学的考察の観点から捉えると、頭部は、自我とアストラル体とエーテル体がある種刻印されたものであり、それはさらにある種分離されたものであるとも言えるでしょう。それでは、頭部の物質体はどうなのでしょう。頭部の物質体は、自我、アストラル体、エーテル体の刻印である物質部分とはまた別の仕方で頭部に存在します。この事柄のより高次の内容をはっきりさせるために、次のことに注意を向けたいと思います。人間の頭部は、まず胎児の中で発生しますが、それはただ単に両親の有機体の諸力から形成されたものではなく、頭部には宇宙の諸力が働いています。つまり宇宙の諸力が人間の中へ入り込んで作用しています。エーテル諸力と呼んでいるものの中には、まだ両親の有機体から多くが作用しています。しかし、すでにエーテル的なものの中には生まれる前の、受胎前に存在している霊的魂的生活に由来する宇宙の諸力が作用しています。さらにアストラル的なものと自我の中には、受胎前に霊界で生きていたものが残っていて、それはのちに人間の頭部を形成する作用を及ぼします。自我は頭部に自らの刻印を作り、アストラル体は物質的な刻印を作り、エーテル体も物質的な刻印を作ります。ただ、物質的な地上で今回はじめて与えられる物質体は、いわば一次的作用であり、それは刻印ではなく一次的に作用するものです。図で描くとこうなります（図１－１）。人間の頭部の形成は自我の刻印です。その中

で自我は機構化されます。この機構についてはもっと頻繁に言及することになるでしょう。自我はある特定の方法で機構化されます。自我は主に、まず頭部の熱状態を自らの中で分化することによって機構化されます。さらにその中でアストラル体が分化します。そのアストラル体は主として、ガス状、気体状のプロセスとして頭部を満たしているものの中に、機構化して含まれています。そしてエーテル体が刻印されます。そして頭部にとっての物質体は物質プロセスです。それは本当に物質的なプロセスなのです（図1-1、斜線）。図式的に示すと、それは図の中で頭部の骨性の後頭部によって示されていると言えるでしょう。その場合、目はこちら側にあると仮定します。しかし、ここで物質諸力に集まっているものは、再び頭部全体に広がります。人間の頭部形成のこの物質部分の中にあるものは、真の一次的な物質プロセスなのです。それは何か他のものの刻印ではなく、そこには自らの固有のプロセスを遂行するものが存在しています。しかしこの物質的な頭部プロセスの中には実は二重性が存在しています。そこには二つのプロセスの相互作用があるのです。そこで起こっていることは、二つのプロセスの相

図 1-1

互作用なのですが、その二つのプロセスというのは、霊的探究者の目を持って、外側の宇宙で起こっている特定の他のプロセスと一緒に概観する時にのみ理解できるのです。

外界の自然において始原岩層における粘板岩形成に現れるプロセス、つまり珪土から粘板岩形成へと至るあらゆるものの中に現れるプロセスを見ると、珪土から生じる粘板岩形成プロセスに作用する諸力の中には、物質的な頭部形成の中で生じるものとは対極的な、対立するプロセスが見つかります。これは人と環境とが関連している重要なもののひとつです。外界の鉱物化の中で生じるこのプロセスは、人間の頭の中にもやはり存在するのです。あらゆる粘板岩形成プロセス、つまり珪土やケイ素〔Silizium〕が関わっている鉱物化プロセスは全て、脱植物化と呼べるものと関連しています。このことは、完全にとは言えないまでも、地質学にとっては今ではほとんど自明のことと言って良いでしょう。私たちは粘板岩形成の中に、いわば鉱物化した植物界を見つけ出さなければなりません。大地の粘板岩形成と同じことを意味するこの脱植物化を理解することによって、人間の頭部の中でそれとは異なる仕方でまったく対極的に生じるプロセスを理解するのです。しかしそれとは別のもう一つのプロセスも、そのプロセスとともに作用しています。そして、このともに作用する別のプロセスは、再び外界で探さなければなりません。例えば、石